

平成23年度 国際教育推進委員会活動報告

国際教育推進委員 工藤泰三 石井克佳 中村 徹 小林美智子
平野延行 岡 聖美 松井一夫 竹内義晴
建元喜寿 今野良祐

筑波大学附属坂戸高等学校（以下「本校」）では平成20年度に国際教育推進委員会を立ち上げ、本校における国際教育を推進するための様々な活動に取り組んでいる。本論では、その中でも特徴的な「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」の実施、トヨタ財団「アジア隣人プログラム」での活動、ユネスコスクールとしての活動、その他の国際交流、および今後の国際教育の推進に向けての取り組みについて、平成23年度の活動をまとめて報告する。

キーワード：国際教育 ESD（持続発展教育） 卒業研究 教科「国際」 「アジア隣人プログラム」

1. はじめに

筑波大学附属学校教育局において附属学校の重点目標の1つとして「国際教育拠点の実現」が掲げられたのに合わせ、本校で国際教育推進委員会（Committee of International Studies、略称CIS）が設けられたのは平成20年であった。それまでも国際教育に関わる活動として海外での校外学習の実施、筑波アジア農業教育セミナーへの生徒・教員の参加、留学生の受け入れなどを行ってきたが、CIS設置以来、全校的な国際教育を実現すべく様々な活動に取り組んできた。

本論では、その様々な活動のうち特徴的なものを主に取り上げ紹介するとともに、本校における国際教育の今後の展開について考察してみたい。なお、平成22年度以前の取り組みについては工藤（2009）、工藤ほか（2010）、工藤ほか（2011）を参照されたい。

2. 平成23年度の国際教育の取り組み

平成22年度以前の活動の成果・課題点を踏まえ、平成23年度は国際教育に関するものとして次のような活動を行った。

2.1. 国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム

実施開始後4年目を迎える同プログラムについて、応募状況および活動内容について概略を述べる。

このプログラムは、本校の教育課程において3年次必修履修科目に位置付けられている「卒業研究」において国際的課題に取り組みたいという生徒に対し、調査研究のための海外渡航費用を援助することにより、その研究の深化を期待するものである。したがって、本プログラムは本来3年次生の支援を主眼に置くものであるが、今年

度は夏季休業中になってようやく予算の示達があったことから、次年度に卒業研究に取り組む予定である2年次生を対象とすることとした。

- ① 支援対象者の募集：10月に2年次生を対象に募集を行った結果、2年次生8名の応募があった。それぞれの生徒の研究テーマと応募理由は表1に示す通りであった。今年度の2年次生は別項で述べる「アジア隣人プログラム」に参加している生徒が20名ほどおり、その影響もあってか、希望渡航先にインドネシアを挙げる生徒が多かった。
- ② 支援対象者の決定：管理職を含めた校内委員会において、書類及び各生徒によるプレゼンテーションにより選考を行った。その結果、「海外への渡航による成果が期待できるか」「渡航目的が明確か」などの観点から、生徒D・E・Fを支援対象とすることに決定した。
- ③ 生徒の活動：3名の生徒のうち生徒D・Eは12月下旬、Fは1月上旬に引率教員とともにインドネシアへ渡り、それぞれの活動を行った。生徒Dは廃棄物を減らしつつ農作物の栽培効率を上げることを目指し、本校の姉妹校でもあるボゴール農科大学附属コルニタ高等学校の生徒とともに、廃棄物から堆肥を作る取り組みを行った。生徒Eは、経済連携協定（EPA）に基づきインドネシアの看護師が日本での就労を目指し多数来日しているが、そのほとんどが試験に合格できずに帰国しているという現状を打破するための方策を探求するために、現地の看護師やNGO職員などを対象にインタビューを行った。また生徒Fはバリ島のキ

ンタマーニ村の名産であるミカンを原材料としたジャムを作りそれを販売することによって、ミカンの価値を高めるとともに村の経済の活性化を図るという考えのもと、実際に現地でジャム作りおよび販売活動を行った。

表 1 平成23年度「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」応募概況

生徒	卒業研究のテーマ	希望渡航先
A	東南アジア諸国の教育事情について	インドネシア
B	パラリンピックの輪を日本に広げる	イギリス
C	フェアトレードの方式を利用してインドネシアへの経済支援システムを作る	インドネシア
D	身近にあるものを使った持続可能な堆肥づくりの提案	インドネシア
E	インドネシアと日本における理想のEPAの提案	インドネシア
F	バリ島の農産物を使った特産品づくり	インドネシア
G	タイから学ぶ！東南アジアで「ドラえもん」がうける理由	タイ
H	ダチョウ産業の活発化	南アフリカ

3名の生徒の活動については平成24年2月に本校で開催された第15回総合学科研究大会の分科会C（持続発展教育）において本人たちが発表したところであるが、彼らは実際に渡航し活動した経験を基に今後卒業研究を進めていくこととなる。どんな研究になるか、非常に楽しみである。

このプログラムではこれまで計7名の生徒を海外に送り出してきた。特に今回は、これまで応募の大半を占めていた環境科学系に限らず多様なテーマでの応募があったことが大きな収穫といえよう。しかしながら、まだ課題も残されている。

① 経費の問題：今回は昨年度までと比較し予算が増額されたため、3名の生徒を海外に派遣することができた。しかしながら、この経費は筑波大学附属学校教育局の教育長裁量経費から支出されており、校費からの支出とは異なり不安定な要素が大きい。校費にはこのプログラムの実施経費を支出する余裕はないため、教育長裁量経費が認められなければこのプログラムは実施できないこととなる。引き続き教育

長裁量経費の獲得に尽力するとともに、並行してより安定的な予算の確保の方法を検討していきたい。

② ことばの問題：今回インドネシアに渡航した3名は、後述の「アジア隣人プログラム」の活動の一環として、近隣の大学のインドネシア人留学生にインドネシア語講座を開いてもらうなどして自主的にインドネシア語を学んできた。その成果もあってか、彼らはこれまでのケースに比べ格段に上手に現地の人々とのコミュニケーションを取っていたようである。このように、特に英語圏でない国へ渡航する場合はかなり前から現地のことばを学ぶしておくことが望まれるが、そのように前もって計画的に言語学習を進めておくことは多くの生徒にとってはかなり難しいことであろう。

③ 渡航先の多様性：予算の都合もあり渡航先がアジア諸国に限られてしまうのは仕方がないが、今回のように多くの生徒が応募してくれたにもかかわらず、結果的に渡航した国がすべてインドネシアだったことは残念である。渡航先をより多様にし、生徒たちにより広い視野を身につけさせたい。

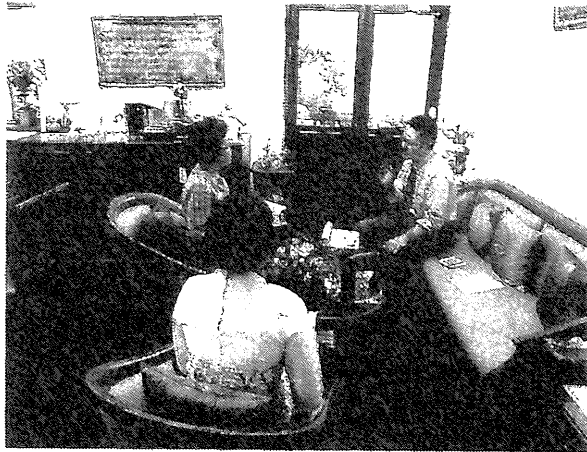
2.2. 教員の国際化プログラム

教員たち自身の国際教育についての知識・能力を高める、そして今後の本校における国際教育発展させるという目的を達するため、今年度は「教員の国際化プログラム」の名のもと次の2つの取り組みを行った。

- ① 第3回ユネスコスクール全国大会に参加（10月、文科省日本ユネスコ国内委員会主催）：すでにユネスコスクールとして活動している各校の取り組みを知り、本校の国際教育を推進する上での参考とした。
- ② タイ・台湾出張（2～3月）：新たな校外学習の実施（後述）に向け、これまで交流のあったワタナー・ウィタヤー・アカデミー（タイ・バンコク）と新民高級中学（台湾・台中）に教員を2名ずつ派遣し、本校から協働学習を中心に据えた校外学習の提案を行った。現在はそれぞれの学校で本校のプランを検討していただいている段階で、今後の反応を基に校外学習の渡航先を決定する予定である。

2.3. トヨタ財団「アジア隣人プログラム」への参加

平成22年度8月に上記プログラムに本校の活動計画（主題：「インドネシアと日本の高校生の協働による、地域のゴミ問題の解決方法の提案と実践～学校が核とな



ワタナー校で本校の提案を説明するCIS委員長（右）

った地域コミュニティーの創造と高校生が発信する3R活動とESD～」をもって応募したところ、2年間で500万円の助成をいただくこととなった。この助成を元手として、2年間のうちに本校の生徒とインドネシアの高校生が協働してそれぞれの国のゴミ問題について調査し、お互いに話し合いながら解決方法の提案を冊子にまとめ、それを用いてそれぞれの学校がある地域でワークショップを行うという活動を行っている。これまでの活動経過と成果をまとめると次のようになる（トヨタ財団に提出した企画経過報告書より）。

<活動経過>

- 2010年11月 プログラムキックオフミーティング（坂戸高校）

コルニタ高校副校長のGatot氏、東京都市大学の佐藤氏、静岡大学の小清水氏、元青年海外協力隊の金林氏を招いて、生徒20名とこれからの活動計画について話し合った。

- 2010年12月 プログラムキックオフミーティング（コルニタ高校）

本校教員2名がコルニタ高校を訪問し、同校のプログラムリーダーDina教諭、スバギオ校長らと活動計画の協議。コルニタ高校の生徒20名に、日本のゴミ問題やプロジェクトの概要を説明。また、坂戸と接続しスカイプにより生徒同士が自己紹介を行うなどの交流を行った。

- 2011年2月 スカイプミーティング（3月渡航の内容討議）

- 2011年3月 坂戸高校生徒5名、教員3名コルニタ高校訪問

国立公園の清掃活動、国立公園周辺地域の高校3校を招いたワークショップ、廃棄物最終処分場の見学、ボゴール市のゴミの状況の確認、インドネシア環境省訪問、JICA訪問等を実施。また、プラスチックゴミから財布や鞆を作っているHeriyanti氏の工房を訪問した。



ボゴールの最終処分場を視察する両校生徒

- 2011年4月 スカイプミーティング（3月渡航の振り返り）

- 2011年5月 スカイプミーティング（両校における3Rの現状について）

- 2011年6月 スカイプミーティング（自分たちでできる3Rについて）

- 2011年7月 コルニタ高校生徒4名、教員1名坂戸高校訪問

東京都中央防波堤埋立処分場、坂戸市清掃センター、ぶくぶくファーム（埼玉県小川町ーバイオガスプラント）の見学、生徒同士の活動ミーティング、全校歓迎会等を行った。また、東京代々木公園で行われたインドネシアフェスティバルに参加した。

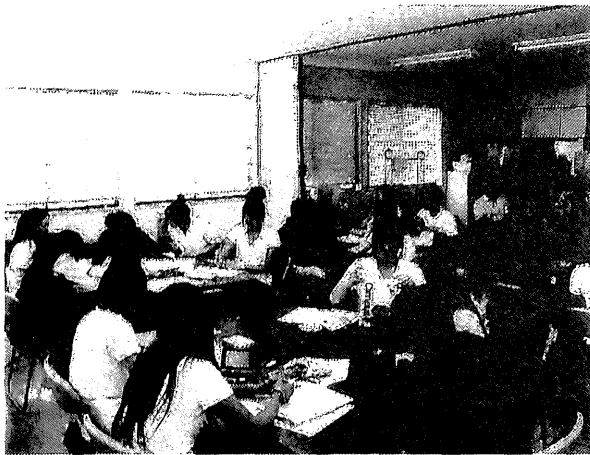
- 2011年9月 坂戸高校文化祭において活動報告、来場者に関する3Rアンケートの実施

文化祭来場者に対して、3Rに関するアンケートを実施。校内にも3Rに配慮した文化祭の実施を呼びかける。また、アジア隣人プログラムでの1年間の活動報告をポスターにまとめ展示・解説を行った。また、インドネシアの物品の展示や、筑波大学に留学しているインドネシアの方を招待して、ジャワ舞踊とバリ舞

踊を披露してもらい、インドネシア文化の紹介活動もあわせて行った。

2011年11月 コルニタ高校生徒2名、教員1名坂戸高校訪問

歓迎会、コルニタ生の授業参加、生徒同士の活動ミーティングに加え、筑波大学で開かれた国際農学ESDシンポジウムのポスターセッションに共同参加しポスター発表を行った。



両校生徒によるディスカッション

➤ 2012年3月 坂戸高校生徒4名、教員2名コルニタ高校訪問

ボゴール市のゴミの状況の調査、前述のHeriyanti氏の工房訪問に加え、近隣の小学生を対象として3Rワークショップを実施。

＜成果＞

まず、この期間中に坂戸高校の生徒代表および、コルニタ高校の生徒代表がそれぞれの国を訪問することができ、それぞれの国のゴミの現状の把握、生徒同士のつながりが出来たことが大きい。学校でのスカイプ会議だけではなく、自宅などでも日本とインドネシアの間でスカイプやフェイスブックを通じて、交流や議論を深めている生徒も出てきている。これまで、学校現場では単発の行事や授業だけで、海外との交流が継続しないことも多かったが、「日本とインドネシアのゴミ問題の解決」という共通テーマを持つことで、日本とインドネシアの若者の交流が継続していることは非常に大きな成果である。また、ゴミ問題だけではなく、そこから派生して教育問題や森林破壊、日本とインドネシアの密接な経済連携などに興味を広げてきている生徒も増えている。また、日本とインドネシアのEPA連携に基づく日本への看護

師派遣問題に関心をもった生徒が、日本語学習指導のボランティアを始めるなど、ゴミ問題をベースとしながらも、両国にある様々な問題に関心を向け活動しはじめていることはESDとしての成果もあがりはじめている。

地域との連携や活動では、インドネシア側では、ボゴール市の水源となっている国立公園の清掃を、国立公園の職員や公園周辺の住民と行った。この際、公園周辺の高校から生徒も参加し清掃活動や、ゴミの最終処分場見学なども実施した。コルニタ高校で行ったワークショップでは、公園の職員が10名ほど参加してくれた。また、ボゴール市の教育委員会も活動に興味を示してくれており、コルニタ高校だけではなく周辺域へ少しずつ広がりをみせている。

日本側では、9月に行った文化祭がはじめての地域住民への情報発信となったが、生徒が開始した地域のゴミ清掃活動に協力を表明してくれる方もおり、少しずつであるが地域を巻き込んだ活動が始まっている。埼玉や東京在住の青年海外協力隊OV、筑波大学のインドネシア留学生、坂戸市の隣の東松山市の大東文化大学のインドネシア留学生も本校を訪問し、生徒に様々なアドバイスを下さっている。また、本校と以前から協力関係にあった「NPO 法人共存の森ネットワーク」が、埼玉県小川町で農業を中心に持続可能な生活を実践されている桑原氏（ぶくぶくファーム主催）をご紹介します。日本とインドネシアの高校生に「自分たちの暮らしは自分たちで良くしよう」と語りかけてくださった。アジア隣人プログラムがなければ、つながることはなかったであろう人たちの輪が、日本でもつながりはじめています。

本プロジェクトでは、「生徒自らが、問題意識を持って、自ら動けるようになる。」ことを目指している。これは教員主導でプロジェクトを動かすより時間のかかることである。与えられることに慣れてきた生徒はとまどう場面もある。しかし、とくに上記の大東文化大学の留学生の方は、生徒自身が、インターネットから得た情報で、都内のインドネシアレストランを見つけ出し、実際に訪れ、お店の人に自分たちのプロジェクトを説明し、協力の快諾を得たものだ。また、リーダーだけに任せてはいけない、また違うと思ったことはしっかりメンバーに伝えて改善していかなければと動き始めた生徒もいる。毎週木曜日の昼食時に、定例のミーティングを行っているが、参加人数が少なかったり、集中できていない生徒もいた。現在はミーティング方法の改善を訴えた生徒が主導して行っている。時間はかかったが、2年間の活動期間の半分をすぎた1年目の終わりの時期に、自ら

動き始める生徒が出始め、グループの質が変わり始めている。彼らの2年目の活動に期待したい。

2.4. ユネスコスクール（ASP-net）としての活動

本校は平成23年1月に正式にユネスコスクール（ASP-net）への加盟が認められた。これにより、国内外計約9,000の学校とネットワークを結ぶことが可能になった。この「ユネスコスクール」の冠のもと、これまでも各所で実践していたESD（持続発展教育）的な実践を再度見直して、各教科や各種活動など様々な場面でそれぞれの専門性を生かしたESD実践が行われたことが今年度の成果と言える。特に「つながり」が実践のキーワードとなり、教科間での学習内容のつながりだけでなく、実際に地域・学校・海外などとのつながりを持つことができた。また、単発的な取り組みとならないように、先述した活動成果を文化祭や年度末に開催する総合学科研究大会で展示や実践報告をし、ESD実践を全校的に共有・発信する場を設けている。こうした多様な活動を支えるには教員研修が不可欠で、ユネスコスクールやESD実践に関わる校内研修を随時実施している。また、昨年度に引き続き「ユネスコスクール全国大会（ESD研究大会）」へ参加（2.2.参照）し、全国の加盟校との情報交換を行った。教員向けのESD海外研修（アメリカ、中国）への参加や外国教員視察交流（アメリカ、中国、韓国、インドネシア）受け入れなどにも積極的に応じている。

また生徒に対しても、今年度はESDをテーマにした研修旅行（ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）主催「第2回ESD国際交流プログラム」、フルブライト・ジャパン主催「ESD日米青年交流プログラム」）に本校生徒2名が参加するなど、持続発展的な社会づくりの視点を養う取り組みが徐々に成果を上げてきている。

しかし、現時点でのESD実践は、授業の選択者のみといった一部の生徒だけの活動となっているものが多く、全校的な共有ができていないかについては疑問も残る。より効果的に他の生徒の学びが自分の学びにつながる場の設定と意識の醸成に努め、真に多角的なアプローチからのESD実践に取り組めるように努力したい。資料として、本校におけるユネスコスクール・ESD実践概念図を添付する（資料1）。

2.5. 新たな校外学習の実施に向けて

前述（2.2.参照）の通り、本校では平成25年度実施の2年次校外学習からその実施方法を改める計画である。これは、国際教育の各活動を約160名の生徒を複数の渡

航先に分散させたうえで校外学習とリンクさせることにより教育長裁量経費や外部資金への依存度を低め、また同時に校外学習の内容を深化させることをねらうものである。具体的には、渡航先別の各グループでテーマ設定を行い、観光中心ではなく現地校との交流および協働学習、国際教育やESDの視点に立った学習活動を中心に据えた行程を組むことを考えている。加えて、これまでその日限りであった現地校との交流を長期間・相互の交友関係へと発展させられることが期待できる。

渡航先としては、これまでも渡航していたオーストラリアに加え、姉妹校のあるインドネシア、そしてこれまでに交流の実績がある学校のあるタイまたは台湾（どちらにするかは平成24年6月に決定予定）の計3か国を予定している。各グループの人数に大きな偏りが出るなどの問題、あるいは事前・事後学習のさらなる充実が必要であるなどの課題はあるが、この新たな取り組みが生徒一人一人が主体的に海外の生徒との協働学習に取り組むための「しかけ」として効果的に機能することを期待している。

2.6. 学校設定教科「国際」の設置

本校では平成23年度入学生の実習課程より学校設定教科「国際」を設け、その中に下記の4つの科目を設定している。このうち2年次対象の科目がいよいよ平成24年度にスタートする。

- ・ Discussion & Debate（2年次一般選択）：日本語および英語を用い、世界の諸相について議論・討論するために必要な基礎能力を養う
- ・ 比較文化論（3年次一般選択）：世界の文化を広く扱い、文化の多様性に対応する素地を養う
- ・ Global Studies（3年次一般選択）：南北問題・多文化共生・国際協力などについて見識を深めるとともに、国際的問題に主体的に関わる姿勢を身につける
- ・ 国際社会（2年次科目群選択）：日本・日本人・日本文化を客観的に理解した上で、世界の様々な国や地域の文化・社会についての理解を深め、今日私たちが持つ国際的な課題について考えるための基礎を養う

いずれも外国語科や地歴公民科などの教科でも扱える内容ではあるが、あえて新教科を設置したのは次のようなねらいがある（平成21年12月17日の職員会議提案資料より）。

（ア）外国語科や地歴公民科での科目の設置も検討さ

れたが、国際教育は特定の教科にその内容の全てを収めることができるものではなく、複数教科の教員が協力・連携しながら互いの知恵を出し合って作り上げていくことが出来る体制を作りたい。

(イ) これまで各教科・系列等で行われてきた国際教育に関わる活動はそのままに、その諸活動を通して身につけた知識・能力を生徒が持ち寄り、より広い視野を持つチャンスを提供したい。

(ウ) 教科名を「国際科」とすることにより、科目を履修しようとする生徒に、授業および関連する活動においては地球的視野を持ち主体的に行動しようとする態度が求められることを意識させたい。

平成24年度においては、2年次科目の実践を行いながら、あわせて3年次科目の実施計画を練っていくこととなる。上記3つのねらいを実現すべく、CIS委員のみならず多くの教員の協力を仰ぎながら、その実現に向けて尽力していきたい。

3. 今後の課題

3年間の活動を通して様々な国際教育活動を実現させてきたが、まだ多くの課題が残されている。そのうち主なものを3つ挙げておきたい。

3.1. 多くの生徒を巻き込む

これまで紹介した活動においては、深く関わる生徒がいる一方で、ほとんど関わりを持たない、あるいは関心を持たない生徒もいることは事実である。授業や諸活動に加え、校内広報紙「CIS NEWS」の発行、さまざまな生徒対象のイベントやコンテストの紹介などを通して、より多くの生徒に国際的視野を持たせられるよう工夫していきたい。

3.2. 教員の意識を高める

本校では一部の教員のみが進めるのではなく全教員が関わる形での国際教育の展開を目指しているが、まだまだ主体的に関わる教員が限られているのが現状である。これまでも職員会議での周知や校内研修会の開催、あるいは本校主催の総合学科研究大会での分科会などを通してより多くの教員に関わってもらえるよう努めてきたが、来年度以降もそのような地道な努力を続けるとともに、海外渡航の引率や海外研修により多くの教員を巻き

込んでいくなど工夫をしていく必要があるだろう。

3.3. 生徒の変容を測る

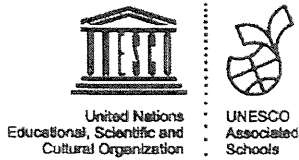
国際教育の目標は「国際化した社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成する」（文部科学省「初等中等教育における国際教育推進検討会報告」（2005））ことである。さまざまな活動を行ってはいるものの、そのねらいが達成されているかどうかを検証する活動はこれまで不十分である。適切な方法を検討した上で、生徒の意識及び能力の変容を明らかにしていくことも本委員会に課せられた課題である。

4. まとめ

CISが生まれて4年が経過した。本校では国際教育・ESDの推進活動が活発に進められている。この動きをさらに発展させていくことに加え、活動の効果を見極める必要性も高まっている。生徒たちが将来国際社会において主体的に活動するための礎を築くことができるよう、また我々教員がその手助けをする能力を一層向上させられるよう、CISはこれからも努力を重ねていきたい。

【参考文献】

- ・ 文部科学省（2005）．初等中等教育における国際教育推進検討会報告．
- ・ 国立教育政策研究所（2010）．「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究」中間報告書．
- ・ 工藤泰三（2009）．「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」平成20年度実施報告．筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要第46集．
- ・ 工藤泰三（2011）．「筑波」の国際教育 ～総合学科だからできることを目指して～．「内外教育」第6062号．時事通信社．
- ・ 工藤泰三ほか（2010）．平成21年度国際教育推進委員会活動報告．筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要第47集．
- ・ 工藤泰三ほか（2011）．平成22年度国際教育推進委員会活動報告．筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要第48集．
- ・ 筑波大学附属坂戸高等学校（編著）（2012）．「新時代の総合学科 総合学科パイオニアに学ぶ基本理念と新たな可能性」．pp.92-105．学事出版



筑波大学附属坂戸高等学校

ユネスコスクール・ESD実践概要図

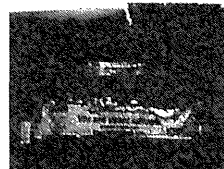
実践テーマ：総合学科の特色を生かした多角的アプローチによるESDの実践



香港と環境生徒と交流授業



国際的視野に立った卒業研究支援プログラム



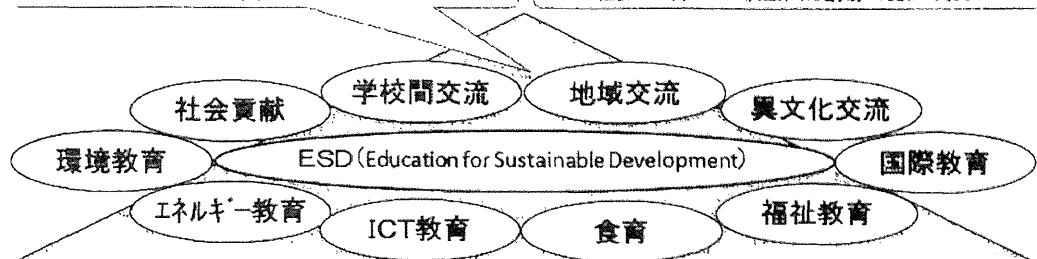
インドネシア・コルニタ高校と姉妹校締結



筑波大学国際農業ESDの取り組みについて発表

総合学科の特色を生かした、多面的な教育活動を実施
特定のトピックに対して多角的なアプローチから追究

多面的な理解に基づいた多角的なアプローチによる研究
国際的な舞台での調査、研究成果の発信・交流



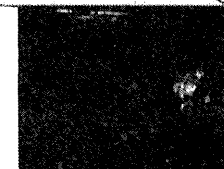
生徒主体の体験型での手話講座



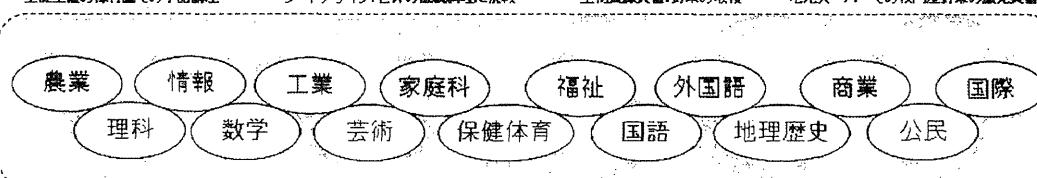
フードデザイン：世界の伝統料理に挑戦



生物資源調査：野菜の収穫



地元スーパーでの校内産野菜の販売実習



生物資源・環境科学 | 工学システム・情報科学 | 生活・人間科学 | 人文社会・コミュニケーション

2年次より専門科目の学習が始まるが、その立脚点として
4つの科目群のうちから1つ選び、学びの柱としていく

少人数のゼミごとに、主題探究学習
および3年次から始まる卒業研究に向けてのプレ卒研



文化祭での福祉作業所との共同販売



アパレル：オリジナルドレスの縫製作業



工学情報基礎：ライトレールカー走行実験



Advanced English：時事問題ディベート

自己理解、社会理解、職業理解、履修計画作成
社会を知り、どのように生きていくか、何を学んでいくか

総合学科での学びのカガチを学ぶ
どのように学び、その学びがどのように生かされていくか

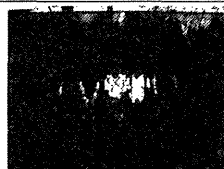
産業社会と人間

キャリア教育

キャリアデザイン



産社：果園づくり



産社：農場体験



産社：福祉入門(車いす体験)



1年次コミュニケーション・キャンプ

